

第59回 日本サインデザイン特別賞 推薦書

特別賞候補

佐藤修悦氏が生み出す道しるべ「修悦体」

対象者

佐藤修悦氏

概要・推薦理由

白い養生パネルに色付きの布粘着テープで張った文字と矢印。縦横の太さが一定で、角に少し丸みをつけた独特の書体は「修悦体」と呼ばれます。

考案者の佐藤修悦氏は、警備会社に勤める現役の誘導員です。きっかけは2003年ごろ、JR新宿駅構内の工事現場で誘導業務をしていた際、行き交う人びとから同じ場所を何度も尋ねられた経験から、現場にあったガムテープでホームの番号と矢印を養生壁に貼ったのが始まりでした。この時、無言のうちに人びとが自然と誘導の方向へ流れていく様子を目にし、以降、手製の案内板を制作するようになります。2007年にはインターネットを通じて話題となり、映画の題字やCDのジャケット、クリニックのサインや美術館の展示物、アートイベントなど活躍の場を広げます。

正式なサイン設置までの間をつなぐ仮初めの書体は一過性のブームに終わらず、愛着をもって世に受け入れられ22年を迎えます。今でもJR新宿駅で見ることができるのは、佐藤氏が駅の誘導員として現場に立ち続けているからにはかなりません。目の前を通り過ぎる人びとの不安に寄り添い、迷いに応え、目的地へ導く思いを「修悦体」に託す。サインそのものの精神を体現する稀有な存在を、私たちは見過ごすことはできません。

推薦者

中西あきこ / 関東地区会員



第59回 日本サインデザイン特別賞 推薦書

■「修悦体」を記録した本 4選

1

話題の新書体「修悦体」をマスターして ガムテープで文字を書こう

佐藤修悦監修，世界文化社／2009 年

佐藤修悦氏初の著作にして決定版。ガムテープで文字を作る工程を記録し作例も豊富。JR 新宿駅での書体誕生の話や、映画の題字を依頼した東映元社長のインタビュー等、当時の活躍ぶりが伝わる。



3

高等学校用芸術科(美術)美術1 平成25年度用文部科学省検定済教科書

光村図書出版株式会社／2013 年

2の記事掲載と同じころ、高校の美術の教科書に「修悦体」が載る。〈文字のデザイン〉の項で「ガムテープで臨時に貼られた駅の案内」と写真で紹介し、街にある文字を集めて作品作りの参考にしようと促す。



特別賞候補 佐藤修悦氏が生み出す道しるべ「修悦体」

2

『鉄道デザイン EX』07

イカロス出版／2013 年

ブームが落ち着いたころ、推薦者の中西あきこが佐藤氏に行った取材記事を掲載。この時「修悦体」で作った JR 新宿駅の〈中央東口〉は、工事完了までの約 8 年間現地に掲出し人びとを導いた。



4

『わたしはどこにいる？道標をめぐるアートとデザイン』

My Book Service Inc. / 2019 年

富山県美術館で開催された同タイトル企画展の図録。出展作家は、秋山さやか、色部義昭、葛西薫、康夏奈、佐藤修悦、田村友一郎、廣村正彰。佐藤氏の項では、原初的なながらも「サイン」と位置づけ、「独特の雰囲気と高い視認性をもつ」を評価した。



第59回 日本サインデザイン特別賞 推薦書

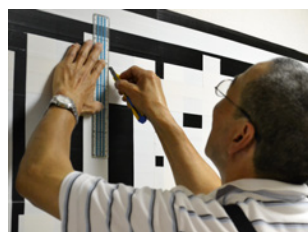
■「修悦体」ができるまで①

「修悦体でサインを作るとしたら、今、どこに必要ですか？」

2013年、『鉄道デザインEX』の取材で中西(推薦者本人)が佐藤氏に伺ったとき、まっ先に挙げられたのがJR新宿駅の中央東口改札(現・中央東改札)出口でした。1・2番線を下って最寄りの改札口ですが、人びとに場所を訊かれ苦労しており、すでに張ったものも効果は薄く、「これをブラッシュアップしたい」とのこと。

そこで新しい案内板を制作していただき、制作工程を追うことにしました。

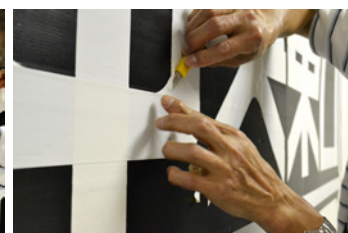
斜め線を足す。
後の切り取りが
最小限になるよう工夫。



すべての線を入れ終え、
次は無駄な線を削ぎ落とす。
道具は定規とカッターのみ。



ここからアールを付けていく。
「修悦体」の真骨頂だ。



外側を切り取って不要になった
ガムテープ片を内側へ。



JR新宿駅「中央東口」の文字制作を追った。
ベースとなる文字枠を作る。



文字の縦横画を張り、文字全体の骨格を決める。



ひととおり文字が完成した。



完成。
開始から約2時間、文字の印象が柔らかくなった。

特別賞候補 佐藤修悦氏が生み出す道しるべ「修悦体」

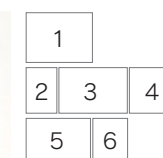
■「修悦体」ができるまで②



工事完了とサインに見る愛着のかたち

佐藤氏は、アートは「遊び心」で案内板は「お客さん目線」と語ります。

「駅の案内板はどの方向へ進めば目的地へ行けるのか明快さが大事」と、余計な情報は入れず文字を大きく仕上げていきます。さらに、案内板を張るとき念頭におくのは初めて訪れる人たちのこと。そのため目の高さを考え見やすい位置に張り、最後に自分が立って誘導するとき最善のポジションを探ります。人びとが何を求めているのか、現場で吸収しブラッシュアップする。その心遣いが長く愛される理由かもしれません。

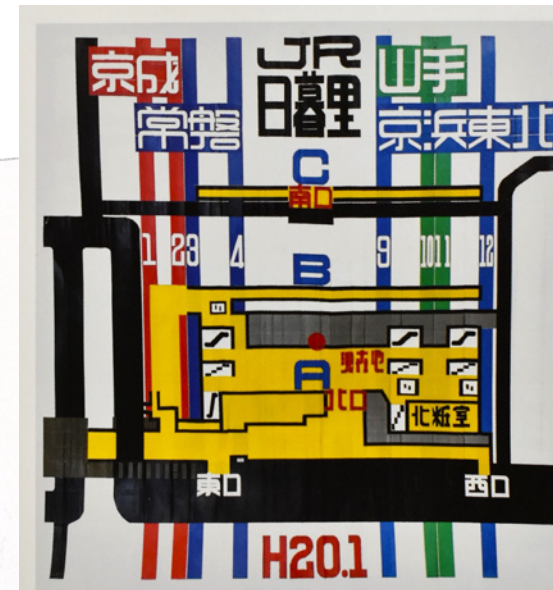


- 2013年JR新宿駅東改札口へ案内する旧バージョンの「修悦体」。
- 同年 取材時、1のブラッシュアップ版に取り組む佐藤氏。
- 黄色地に黒文字の着色、斜上・横長の矢印へ変更。
- 駅へ許諾を取り、2021年東西自由通路完成まで掲出。
- 2025年現在、正式なサインでも踏襲された斜上の矢印。
- サインに見る愛着のかたち。2021年、カプセルトイでグッズ展開に至った。

■佐藤修悦氏のガムテープのタイポグラフィと活動〈セレクション〉

1. 2008年／JR日暮里駅 出典『ガムテープで文字を書こう』（2009年掲載より）
2. 2008年／JR日暮里駅 出典『わたしはどこにいる？』（2019年掲載より）
3. 2013年／モノレール浜松町駅応接室
4. 2013年／修悦体
5. 2013年／即興鉄道文字
6. 2013年／JR新宿駅中央東口〈習作〉
7. 2014年／モノレール浜松町駅
8. 2016年／JR新宿駅（佐藤氏撮影）
9. 2025年／JR新宿駅東口
10. 2025年／JR新宿駅東口
11. 2025年／創作「夢」「ともに」

	1	2	3
			4
5		6	7
8	9	10	11



第59回 日本サインデザイン特別賞 推薦書

特別賞候補

佐藤修悦氏が生み出す道しるべ「修悦体」

■安田クリニックのロゴ、サインの数々(静岡県浜松市)

安田クリニックは、全国で唯一、院内全体に「修悦体」が使われている病院です。2009年4月の開院にあたり、院長の安田峯次先生が佐藤修悦氏に依頼したのは、もともとは医院のロゴとマークでした。ところが佐藤氏は、受付や化粧室をはじめとする院内のあらゆる部屋のサインまで、すべて修悦体で丁寧に書き下ろしてくれました。

その一つひとつの文字はすべて原画として残され、現在も院内に展示されています。訪れた人が思わず足を止めて見入るその空間は、いわば「修悦体ギャラリー」となっており、病院でありながらどこか心和む場となっています。

安田先生が佐藤氏に感じたのは、「誠実さ」や「実直さ」といった言葉では言い尽くせない、「善良」という人柄でした。誰に指示されたわけでもなく、駅を行き交う人々のために自ら文字を描き続けた佐藤氏の行動に、その善良さは体现されています。そしてその心こそが、修悦体という書体を生んだ原動力でもあります。

「医療従事者は、善良でなければならない」——これは安田先生の揺るぎない信念です。安田クリニックは、大腸癌・胃癌の早期発見と、人生を自宅で全うしていただくための在宅緩和医療を二本の柱としています。医院は急性期の患者を高度医療機関へとつなぐ“入口”であり、治療を終えて地域へ戻る患者を受け入れる“出口”としても機能します。その両方の場面において、患者が迷わず、安心して行き交えるように導くことこそ、医師として果たすべき役割だと先生は考えています。

その“道しるべ”という存在でありたいという思いは、駅構内で人々を導くために設置された修悦体のサインと、深く通じ合っています。医療とサインデザインという異なる領域ながら、その根底には「善良でありたい」という共通の姿勢が確かに存在しているのです。

修悦体に囲まれたこの空間で、安田先生は医師として「善良であること」、そして「患者にとって確かな“しるべ”であり続けること」を静かに、そして力強く心に刻みながら、日々診療に向き合っています。



佐藤氏が手がけた医院のロゴには、安田先生の想いが込められています。モチーフとなった「Y」は安田（Yasuda）の頭文字であると同時に、免疫グロブリンの形、患者を支える手の形にも見えるようデザインされています。中央の黄色い玉は、医院が位置する浜松・都田地区の柑橘類を象徴しています。



修悦体サインのオリジナル原稿が並ぶ「修悦体ギャラリー」。駅構内の掲示物は時を経て失われてしまいましたが、このテープ文字は大切に展示されています。